

知的障害のある青年の進路及び職業に関する意識の研究

ーフォーカス・グループ・インタビューを通してー

山本由佳莉*・三木裕和**

A Study on Career Paths and their Alternatives of Young Adult with Intellectual Disabilities -Through Interviews with Several Focus Groups-

YAMAMOTO Yukari*, MIKI Hirokazu**

キーワード：知的障害，青年，進路，職業

Key Words: Intellectual Disabilities, Young Adult, Career Paths, Occupation

I. 研究の目的

知的障害のある青年は、特別支援学校高等部などを卒業すると、大半が一般就労や福祉施設利用などによって社会に出る。実際、平成 25 (2013) 年度の学校基本調査には、特別支援学校高等部（本科）卒業後、知的障害部門では卒業者の 30.2%が就職、64.3%が社会福祉施設等入所・通所と示されている。一方で、知的障害のない青年は、高等学校を卒業しても半数が教育機関へ進学する。もちろん、橘木（2010）¹などが指摘するように、そこには進学格差が存在することも事実である。しかし知的障害のある青年の高等部卒業後の進路選択肢の「狭さ」は、特有の課題として論じられてきている。

本研究は、知的障害のある青年の進路及び職業に関する意識を明らかにすることを、その主たる目的とする。なぜ意識に着目したかという点、現在の学校教育、とりわけ就労移行期に行われる進路指導、職業教育、キャリア教育の目標・内容その他と、知的障害のある青年の意識にずれがあるのではないかという問題意識を持ったからである。

我が国では、障害者の雇用促進が政策として謳われて久しい。障害者の法定雇用率の引き上げや、その達成が全国的に目指されている。また、教育の分野では、高等部単置型の特別支援学校が増加しており、人材育成的な指導を押し出す学校も一部存在する。

一方、近年の研究で、知的障害特別支援学校高等部卒業後の知的障害者が、職場の人間関係などが原因とみられる精神的不調に陥り、離職をするケースが少なくないことが報告されている（安達、2008）²。また、知的障害特別支援学校高等部の進路指導担当教員が、生徒の意欲や主体性の不十分さを困り感として持っていることを明らかにした研究（藤井ら、2014）³もある。

障害者雇用促進の動きは、障害者の経済的自立や共生社会の実現を目指す上で、確かに重要である。しかし、筆者は、知的障害のある青年が仕事を続けにくい理由や、意欲・主体性の乏しさを見逃ごして、就労促進を進めることで、何らかの問題が生じるのではないかと危惧するのである。そし

* 兵庫県立こやの里特別支援学校教諭、平成 26 年度鳥取大学大学院地域学研究科卒業

** 鳥取大学地域学部地域教育学科

て、その問題は、他の誰でもない青年ら本人にふりかかるのである。

これらの考えから、本研究の目的を上記のように設定し、今後の教育が検討する必要のある事項を示唆したい。

II. 方法

1. 調査対象

対象は、基本的に10代後半から20代前半の、就労移行期にある青年(例外あり)とし、知的障害のないグループは四年制国立大学の教育学科及び文化学科の学生に協力を依頼した。知的障害のあるグループは、A大学附属特別支援学校高等部専攻科、A大学臨時用務員F支援室、就労継続支援事業A型施設Wに所属する方々に、所管する部署の同意を得たうえで、本人に依頼した。どちらも快諾いただき、2013年11月から2014年10月の間に1回ないし2回実施した。

知的障害のあるグループについては、A大学附属特別支援学校の在学学生か卒業生に対象を焦点化した。A大学附属特別支援学校は、独自に発達段階表を作成し、生徒一人一人の発達段階を、幅を持たせつつ評定している。研究紀要を見てみると、例えば高等部農園班には、3歳ごろの段階から9、10歳頃の段階の生徒が在籍している。また、環境整備班には3歳半～4歳半の段階から、7、8歳頃の段階の生徒が在籍している。さらにビジネス班には、4歳半頃の段階から9、10歳頃の段階の生徒が在籍している。つまり、いわゆる中度から軽度の生徒が在籍しているといえる。

また、この学校には高等部に専攻科が設置されているが、3歳半頃の段階から9、10歳頃の段階の生徒が在籍しており、高等部本科と類似した構成となっている。

教育目標は、「楽しい学校生活の中で、『自分づくり』を基礎として、一人一人の力を精一杯伸ばし、働くことに喜びを持ち、社会の一員として豊かに生きる人間を育成する」としている。就職率100%を目指すなどの特殊な目標は掲げていないということで、対象群の抽象度は高い。

こうして、知的障害のある青年については「A大学附属特別支援学校の在学学生か卒業生」という一定の条件を設けたうえで、就労や新たな進路に関して異なる条件の3グループに調査を行い、分析した。A大学附属特別支援学校高等部専攻科の生徒は、2年後ないし1年後に学校卒業を控えている。A大学臨時用務員F支援室の室員は、A大学の臨時用務員として雇用されており、事務作業や清掃作業などを行い、収入を得ながら、期限付きの雇用であるため新たな進路を目指している。就労継続支援事業A型Wで働く者は、少し例外的であるが、就労してある程度期間が経過しており、転職などは基本的に考えていない。

ちなみに、本研究では対象者に発達検査や知能テストなどは実施していない。ただ、知的障害のある青年の中でも一般就労を進路として検討している方で、いわゆる「軽度」といわれる方を対象とし、A大学附属特別支援学校の在学学生か卒業生という一定の基準を設けた。しかしこれは決して、A大学附属特別支援学校の実践について検討することを意図したものではない。

2. 調査期間

2013年11月～2014年10月

3. 調査方法

調査の方法は、フォーカス・グループ・インタビュー⁴で

<調査の流れ>

知的障害のある青年の中には、就労準備が不十分な者がいるのではないかと



1回目インタビュー



中間的結果



2回目インタビュー

ある。実施場所はA大学内1室または協力者の所属する学校および施設の1室であった。実施時間は1時間程度であった。

調査は図に示したように、「1回目インタビュー」と「2回目インタビュー」をそれぞれ行った。「知的障害のある青年の中に、就労準備が不十分な者がいるのではないか」という考えを確かめるために、知的障害のない青年グループと知的障害のある青年グループに1回目インタビューを行い、そこで出た中間的結果についての考察を深めるために、知的障害のある青年グループのみに2回目インタビューを実施した。

Ⅲ. 1回目インタビュー結果

知的障害のない青年グループと知的障害のある青年グループへのインタビュー結果を比較し、知的障害のある青年の進路や職業に関する意識の特徴を明らかにした。知的障害のない青年と比較したときの顕著な違いを3つ見出した。以下に示す。

1. 自己の進路の希望があいまいであり、具体的な職業名がほとんど出てこない

知的障害のあるグループ3つのうち、今後一般就労も含めた新たな進路を検討している2グループについて、どの仕事に就きたいかという質問に対し、次のような発言があった。「まだ決まってはいるんですけど、高校とかでした、あの、清掃だったり喫茶」「体力仕事がしたいとは思ってるんですよ」「農園ばっかじゃ無理って言われたので、俺も体力やあの仕事したいんですけど」「体力と事務仕事どっちもつきたいですね」。これらを筆者は「カテゴリー的に希望進路を挙げる」という特徴とした。

この特徴は、知的障害児教育が昔から取り入れてきた「作業学習」の影響であろうことがまず推察される。清水⁵は「作業学習」の説明で、「作業学習は、作業活動を中心にすえて学習を組織することで、生活していくのに必要な一般的な知識・技能とあわせて、働く意欲や習慣と態度を育成することをめざしている」と述べている。このことからわかるように、「作業学習」は特定の職業に就くための知識・技能や態度の習得をめざすものではない。しかし「作業学習」で扱われる「清掃」「喫茶」などは、知的障害のある人が就労可能な範囲であったり、教員らが職場開拓をしてきた範囲であったりする場合がほとんどである。そのため、知的障害のある青年が職業希望の選択肢を、カテゴリー的に意識するのは自然であるともいえる。

しかし、知的障害のある青年が、社会に存在する職業について、興味のある領域でさえ、具体的な職業名あるいは具体的な職場のイメージを持ちにくいという結果は、今後の検討課題として受け止める必要があると考える。

2. 進路についての夢や憧れを語る事が少なく、身近な仕事や実習経験を答えることが多い

1と同様に、新たな進路を検討している2グループでは、進路希望の理由として「実習で行ったから」「母が就職させたいと言っていたので」「親戚のおばちゃんに介護の仕事してる人がいて、場合によってはわからんことも教えてくれるかなと思ったりして」といった発言に見られるようなことである。これらの希望理由は、自己の適性を見極めていくと捉えることもできる。しかし、知的障害のない青年と比べてとき、その違いが際立つのである。知的障害のない青年は、自己の理想像や、憧

れの人と照らし合わせて希望理由を語った。一方、知的障害のある青年は、「こんなことがやってみたい」「こんな風になりたい」という発言が極めて少なかった。

もちろん、夢や憧れを語ることが必ずしも積極的な意味しか持たない訳ではない。加藤⁶は、若者の「自己実現志向」に対する批判が存在することに注目している。その批判とは、大まかにいえば「やりたいことを追い求めるより現実を見るべきだ」というものである。しかしこれに対して加藤は、“なぜ”若者が「自己実現」的な語りをしてしまうのかを解明すべきだとしている。そして、若者には就職に対する不安があるために、自己防衛・弁護的に「自己実現」的な語りをしているのではないかと述べている。

これを逆に考えれば、知的障害のある青年が“なぜ”夢や憧れを語らないのか明らかにすることで、彼ら本人にとっても、社会全体にとってもより有意義な方向性を示すことができると考えられる。

3. 自らの長所について「思いつかない」と答えたり、行動や学業的能力など外形的な面を答えたりする

知的障害のある青年グループ3つに共通して見られた特徴である。自己の長所について尋ねたところ、「こういうことってなかなか思いつかない。反省点の方が多いしな」「思いつきません」「何も思いつかんので今、思いつきそうで思いつかん」「考えたこともなかった」「ない。(中略)マジで、わかりません」と、思いつかないということをはっきり述べる発言が目立った。また、「いいところを見て褒める」「記憶力がいいところ」「字をきれいに書くところです」「優しいとか、几帳面、真面目」「自分のすべきことはちゃんとするという(ところ)」といった発言が見られた。これは、知的障害児者の自己概念に関する先行研究とも一致する特徴である。知的障害のある人は、自己客観視が難しいということはいくわゆる。この特徴はそれを裏付けるものとなった。同時に、知的障害のない青年ならば、自らの性格・人格を職業選択の判断基準とするといわれているが、知的障害のある青年にとって、それが難しいということが推測される。

つまり、知的障害のある青年の主体的な就労先選択のためには、彼らの独自の判断基準が何なのか明らかにし、それが就労に適切な判断基準なのか見極める必要がある。また、主体的な就労のための判断基準を、彼らにわかりやすい形で提示したり、身につけさせるための指導を検討したり、あるいはそのような判断基準の獲得が難しくとも、就労後を具体的にイメージし、納得するまで職業や職場を選ぶことができる仕組みを検討する必要があるということである。

IV. 2回目インタビュー結果

1回目インタビューで見出した中間的結果をもとに、知的障害のある青年の進路及び職業に関する意識についての考察を、さらに深めるために、2回目インタビューを実施した。知的障害のある青年グループ3つ⁷に実施し、共通の特徴4つを見出した。実際に給料を得て働いているグループほど、これらの特徴がはっきりと見られた。

1. 幼少期には具体的な職業への夢や憧れを持っていた

「小さい時、大人になったら何になりたいと思っていましたか」という質問に対する答えと、それに付け加えての補足的な発言から、以上のような特徴が見出された。「小学校の時は、ラーメン屋になりたいと言っていました」「カウンセラーもありますね。よく相談された時もありましたし」「パン

屋になりたいと思ってました」(小学校時代に食べたパンがおいしくて、自分も作ってみたいと思ったから)「動物園の飼育員」(動物が好きなのと、いろんな動物を見てみたいから)「中学校の作文に警察官になりたかったって書いた」「学校の先生」といった発言があった。

さらに、()内に表わした、ある職業を希望した理由も、「あんなことをしてみたい」「こんな風になりたい」という夢や憧れが大半であった。

上記の特徴は、知的障害がなくてもよく見られるものである。2012年に第一生命が行った、夏休み子どもミニ作文コンクールアンケートでも、男児はサッカー選手が一位、学者・博士が二位であるし、女子は食べ物屋さんが一位、看護師さんが二位となっている。障害の有無に関係なく(障害の程度によって違いはあるかもしれないが)、幼少期には職業に夢や憧れを抱くことが多いのである。

つまり、知的障害のある青年らの中には、幼い頃には、知的障害のない青年と同じように、特定の職業に夢や憧れを抱いていた者がいるということである。

2. 幼少期の希望職業に就くことを現実困難と考え、あきらめた過程がある

しかし、職業希望がどのように移り変わったのかを尋ねると、以下のような発言が見られた。「資格とかうんぬんがあって(あきらめた)」「勉強したんですけど、時間が無くて」「近くに(動物園が)無いし、勉強もしないといけない」「障害者には、なれるわけがないと思った」「現実的に考えて、大学に行かないといけないし」といったものである。

知的障害のある青年の中には、それぞれの希望職業が実現困難であると、ある段階で考えるようになる者がいるとわかった。協力者らはそれを「障害者にはなれるわけがないと思った」「大学に行かないといけない」「勉強したが時間が足りなかった」「近くにないし、勉強しないといけない」「資格を取らないといけない」などの意味づけで語った。障害がなくても、自分には向いていないとか、金銭的なことを考えて夢をあきらめるプロセスは存在する。しかし、知的障害のある青年の場合、「障害」「大学」「資格」といった明らかな社会的障壁によって、夢があっさりと崩れてしまう可能性が高くなっていると考えられる。また、彼らは「大学に行かないといけない」と表現しているが、実際に大学受験をしたり資格試験を受けたりしたわけではないと考えられる。そうではなく、彼らはテレビや周りの大人からの情報によって、夢や憧れをあきらめてきたのではないだろうか。

このように、知的障害のある青年は仕事に対して持っていた積極的な印象を打ち砕かれやすく、意欲がわきにくいと考えられる。

3. 働くことそのものを、肯定的な意味で捉えている

「もし生活に困らないくらいたくさんのお金があったとして、あなたは働きますか」という質問をしたときの回答と、そこから発展した議論により、彼らが働くことそのものを肯定的にとらえていることがわかった。

それは、「やりがい」「達成感」「実感」などで表現されるように、労働を通して生まれた生産物に対する手ごたえであったり、自分たちの製品がスーパーに並んでいるのを見たときの「ああ〜、出るなあ」という感覚であったりした。また、仕事仲間や得意先と「お疲れ様」「まいど」と言い合うことで、労働にとって仲間が欠かせないということも実感していた。

この特徴は既に働いているグループほどはっきりと現れた。専攻科の生徒は働いた事がないので「やりがいがあったほうがいいんじゃないのか」といった推測の域を出ないが、働いている人たちは「達成感がある」と言いきっていた。給料をもらって働くと言う経験が、彼らの内面を豊かにし、彼

ら自身の気づきを膨らませているということができる。

4. 結婚や一人暮らしなど生活の主体者としての展望を持っている

将来どんな生活(暮らし)をしたいかという質問に対する回答と、そこから発展した議論に、次のような発言が見られた。「友だちと暮らす」「お出かけしたいなって。好きな音楽かけながら車で」「結婚して、幸せな家庭を築きたいです」「家族を作って、今までどおりに。いい人を見つけて」「彼女さんできたときに、同棲とかしたときにそんなんでも給料とかで一緒に暮らしたり」「僕も出会いがあったら結婚したいけど」「一人暮らししたいなって」といった発言である。

知的障害のある青年は結婚や一人暮らしなど、人生の主体者としての将来展望を持っていた。この特徴も、既に働いているグループほど、はっきりと見出された。周囲の知人が結婚や一人暮らしをする中で、自分もしてみたいという思いが膨らむことだろう。また、親元を離れてパートナーと新たな生活を始めたいという気持ちも広がっていると考えられる。このような、仕事とは別の領域での将来展望が支えとなって、仕事で大変なことがあっても頑張ろうと思えることもあると考えられる。

V. 考察

1. 進路や職業に関する具体的なイメージの持ちにくさ

インタビューでは、知的障害のある青年の中に、カテゴリー的に職業を把握していたことや、詳しい職務内容について答えることができない者がいることがわかった。このことから、これらの者は将来への具体的なイメージを持っていないと推察した。しかし、筆者の考える主体的な就労のためには、就労前から具体的なイメージを持つことが重要である。よって、学校をはじめとする就労移行期の支援機関は、よりいっそう彼らの将来イメージを充実させるよう、指導・支援の在り方を検討する必要がある。

2. 夢や憧れを語りにくいのはなぜか

また、かつて希望していた職業について、「障害者にはなれるはずがないと思った」「大学に行かないといけない」「資格が必要だが時間がなかった」など、社会的障壁を理由にあきらめた過程に関する発言があった。このことから、知的障害のある青年の中には、もしかすると知的障害のない青年以上に、夢や憧れを簡単にあきらめざるを得なかった者がいるのではないかと考えられた。このような内面を考慮に入れて、不安やためらいを受けとめながら、焦らず丁寧に、就労へ近づけていく支援が必要である。そのためには、生徒がどのように職業希望を形成してきたのか、生徒が将来にどのような思いを持っているのか、慎重に聞き取っていくことが大切である。

VI. 今後の課題

本研究では、知的障害のある青年の中に、希望職業や希望進路に関する具体的で多面的なイメージを持ちにくい者がいることが明らかとなった。知的障害のある青年は、知的発達の遅れがあるので、一度に多くの知識を習得することや、一つの物事を様々な視点から捉えることに困難があるだろう。しかし、だからこそ、体験などを交えて丁寧に身につける手助けをしなければならぬ。その内容や方法について、これまでの実践を踏まえながら検討していく必要がある。

また、知的障害のある青年に自己の長所をたずねると、「思いつきません」と答えたり、字を丁寧

に書く、友だちのいいところを見て褒める、といった外形的な面を答えたりするなど、先行研究でも明らかにされてきた特徴が見られた。しかし、よりよい就労には自己に対する一定の自信が必要であると考え。このことから、彼らの中には、まだ就労するには早く、さらに自己を見つめる期間が必要な者もいるのではないかと考えられる。よって、学校教育ではこの課題を引き受け、例えば仲間との語り合いなどを通して、彼らの自信をより育てる必要がある。また、教育年限の延長についても、よりいっそう活発に議論を進めるべきであると考え。

本研究では、知的障害のある青年が、知的障害のない青年と比べたとき、夢や憧れを語りにくいことが明らかになった。また、その背景には、幼いころの夢や憧れを、周囲の大人やメディアによってあっさり否定され、あきらめてきた過程があるのではないかと考えられた。指導者・支援者は、このような経験をしてきている青年がいるかもしれないという捉えを持ち、彼らがあきらめがちであったり、意欲を持ちづらくても、根気強く寄り添っていく必要がある。

今回は、就労前の知的障害のある青年の内面に焦点を当て、彼らのよりよい就労のための課題を考察してきたが、知的障害のある人にとって働きやすい職場づくり、新しい職業の開拓などを進めることも重要である。つまり、就労する本人の内面的な準備を十分にするだけでなく、周囲の人々の理解を含めた就労先の環境整備をしていかなければならないということである。

-
- 1 橋木俊詔 (2010) 『日本の教育格差』岩波新書 pp45-47
 - 2 安達忠良 (2008) 「特別支援学校の進路指導からみる就労支援の課題」障害者問題研究 第 36 巻第 2 号 pp136-142
 - 3 藤井明日香・川合紀宗・落合俊郎 (2014) 「特別支援学校 (知的障害) 高等部進路指導担当教員の就労移行支援に対する困り感」高松大学研究紀要第 60, 61 合併号 p122
 - 4 フォーカス・グループ・インタビューとは、特定の話題について選ばれたグループによる、形式ばらない自由な議論のことである。
 - 5 茂木俊彦 (編) (2010) 『特別支援教育大辞典』旬報社 清水貞夫「作業学習」p296
 - 6 都筑 学 (編) (2008) 『働くことの心理学』ミネルヴァ書房 第 5 章 加藤弘通「格差社会における若者の<自己実現>」 p104
 - 7 1 回目インタビューと同様に、A 大学附属特別支援学校高等部専攻科、A 大学臨時用務員 F 支援室、就労継続支援事業 A 型施設 W を対象としたが、メンバーに一部変更があった。

(2015 年 6 月 5 日受付, 2015 年 6 月 11 日受理)

